

現代の人々が話している日本語は、30年前と同じ使い方がされているのであるのか？

「ことば」は、時代によって、不変的なものがある。

本書は、現代の日常生活で使っている日本語の「ことば」についての研究書であるが、誰でも気軽に楽しく読めるようにエッセイ風に書かれている。

現代日本語研究会が調査した『談話資料』の知見報告書に掲載されている事例、及び、文化庁が実施している「国語に関する世論調査」などの客観的なデータの分析などが、グラフや表を用いて分かりやすく説明されている。また、ブラウン&レヴィンソン『ポライトネス言語使用における、ある普遍現象』の理論研究の文献や様々な出版社の『国語辞典』、『日本語学』などを基に、

遠藤織枝 編

ひつじ書房 1728円
☎03-5319-4916

今どきの日本語

変わることば・変わらないことば



日常語の「ことば」について専門的な視点から論じられている。例えば、「やばい」ということばを挙げて、江戸時代には「香具師や犯罪者仲間などの社会での隠語」であったため、一部の国語辞典では掲載されていなかったこと。そして、現在では、①「授業に遅刻しそうでやばい」という否定的な使い方、②「この酒はやばい」(この酒を飲むとつぶれてしまうのであぶない)という否定的な意味と、③「この酒は、飲み始めるとやめられなくなるほどうまいのがあぶない」という肯定的な意味の使い方があり、さらに、④「この酒はうまくてやばい」、「このラーメンやばい」と、若者世代では肯定的な使用が多くなってきたことなど、「コミュニケーションの場面や話す相手によって異なることを語っている。「ことばは人間そのものです、社会そのものの反映です。」と編者の遠藤氏のことばが深く印象に残っている。

(愛知教育大学教授・高橋美由紀)